

近藤芳美

田井 安曇 著

近藤芳美

田井安曇 著

短歌シリーズ・人と作品 20

田井安曇（たい・あずみ）

昭和5年冬長野県に生まれ、愛知県に学ぶ。戦後文学修行期に近藤芳美に遭遇、同人誌「未来」創刊に加わり、編集に次第に深く関わる。歌集に「木や旗や魚らの夜に歌った歌」「天一乱調篇」「我妻泰歌集」「たたかいのししむらの歌」（以上私家版）「水のほとり」「右辺のマリア」、「父、信濃」歌論集に「現代短歌考」、「拍車と準繩」がある。

短歌シリーズ 20
人と作品

近藤芳美

昭和五十五年五月五日 初版発行
平成六年八月二十日 三版発行

定価は函に表示してあります。

著者 田井安曇

発行者 田中良和

印刷所 朝日精版印刷(株)

発行所 株式会社 おうふう
(桜楓社)

東京都千代田区猿樂町二一―一六

畑山第一ビル

電話 三九五―八七七―(営業)
振替 東京 四一六六五二四二

ISBN 4-273-00521-2
Printed in Japan

検印省略

序

対象の近藤芳美と書き手のかかわりは、歌誌「未来」の創刊以前に遡るから、優に三十年を越える。しかし「未来」では師弟関係をはじめから無いものとして出発したから接点はきわめて少ない。この間に細大洩らさず加えたとしても直接の対話というものはどう見積っても二時間か三時間にしかないだろう。まして歌の話、さらに彼自身の歌ということになると、歌会での批評という形で四、五度あったかなかったか、というくらいであらう。

もっとも文章は何度か書いたし、そのうちの何度かは己れの進退を賭けねばならぬ愛憎のうちに筆を運んだ。きざなことばだが「対決」というのに近い何度かの挑戦であった。

もともと文学少年と政治少年の間を激しく往復した私は、異質の作家として近藤芳美に接し、いつもどこか異質のまま今日まで来たようである。実質的には「弟子」であらうが、そういう意味でははなはだ不肖の「弟子」の一人である。まぎれもなく「未来」が私を創ったと思っているが、そこいらのことが執筆に当ってどう正負としてあらわれたか、私に今目測する力はない。書くだけでせい一杯だったからである。

この仕事は、直接的には昭和五十二年の『定本近藤芳美歌集』（要するに全歌集）の数次にわ

たる校訂と索引作り、及びその所産であつた短歌研究文庫『近藤芳美歌集』（一六〇〇首選出と
そのための作家論）作製、明治書院『研究資料現代日本文学』執筆等に続く一つの決算であつた。
しかし、近藤論の重要かも知れぬ一部、「未来」の率い手としての側面、および現代歌人協
会理事（のちに理事長）としての面については、前者は私が現にその編集人であることによつ
て、後者は私が怠けもので会合に出ないので、ともに書けなかった。

戦後短歌も幾めぐりかして、真ッ向からの近藤芳美否定の風潮があることももちろん知って
いる。私自身昭和三十年代にそれをしなくもなかった。勇み足の跡は『現代短歌考』等に歴然
としている。そういう経歴をもひつくるめて、近藤芳美の全身像を洗い出して置きたかった。
実像ぬぎの流行としての否定などは文学には何の役にも立たないからである。

もっと精緻な近藤論を組み立てるためにも必要と考え、年譜はくわしすぎるほどのを付けた。
とにかく、今は書きあげることによって一本の道を付けえたかと、素直によるこんでいる。

一九八〇年四月二十四日

著 者

序

作家研究編

一 搖籃期……………九

- 1 朝鮮に生まれた…九
- 2 広島、歌と出会う…二六
- 3 東京、土屋文明という揺籃…三

二 『早春歌』の時代(1)……………元

- 1 開眼…元
- 2 時代…三
- 3 「ジュリアンソレル」の歌…三
- 4 「楽しい日々」…三
- 5 就職…四
- 6 ふたたびの朝鮮…四

三 『早春歌』の時代(2)……………五

- 1 愛…五
- 2 「春早く咲き出づる花」…六
- 3 天の火―戦場相聞…六
- 4 「国は今は…」…六

四 『埃吹く街』と『静かなる意志』……………七

- 1 飛躍のうしろの屈身…七
- 2 「彼ら」の中…七
- 3 第二芸術論的現実…八
- 4 「政治」直視…八
- 5 「技術者」と「民

衆の一語……六九 6 「少女たち」と「党」と……三二 7 ためらい
のち……九五

五 朝鮮戦争の中の『歴史』『冬の銀河』……………二〇〇

1 予感……二〇〇 2 痛みを彫る……二〇四 3 講和条約―「移動する
鏡」としての詩人と妻……二〇六 4 豊島園の家……二一六

六 政治と文学―『喚声』と『異邦者』……………二三三

1 音楽……二三三 2 60年安保まで……二三〇 3 ソビエト旅行……二三四
4 アメリカ体験、付「妙高」……二四二

七 今日の彼方に―ベトナム戦争歌集群……………二四七

1 「この地焚かれ」……二四七 2 行方不明の一匹の黒豹のこと、
ほか……二五三 3 詩人の道……二五五

秀歌鑑賞編

落ちて来し羽虫をつぶせる (二六四) かそかなる事と言はむ (二六七)
昼すぎよりおびただしき つきつめてははや疑はず (二六八)

天道虫が (二六〇) 遠く来てなほ野のくぼに (二六九)

果物皿かかげふたたび	(一七〇)	あらあらしく水吹く機械の	(一九)
凍死せる苦力は昼迄に	(一七一)	帰り来て踏まれし靴を	(一九二)
胸にうづめて嗚咽して居し	(一七二)	立つ兵の何か呼び	(一九三)
崩れたる壁より深く	(一七三)	吾が降りしあとより硝子	(一九四)
貼られ来るかそかなる	(一七四)	すでにして寝ねたる妻よ	(一九五)
政治など専攻せざりしを	(一七五)	引揚げて幾たび仕事	(一九六)
国は今は一兵の兵を	(一七六)	苦しみて共に働かし	(一九七)
髪切りて幼き妻よ	(一七七)	又秘めて美容学校に	(一九八)
吾は吾一人の行きつきし	(一七八)	彼ら皆痴呆の如き	(一九九)
部屋深くさし居し夕日	(一七九)	測量に共に苦しみし	(二〇〇)
苦しみし十年は過ぎて	(一八〇)	風いまだ冷くて立つ	(二〇一)
降り過ぎて又くもる街	(一八一)	今の日に苦しみ覚に	(二〇二)
言葉知らず働き合へば	(一八二)	火の気なき夜を更かし読む	(二〇三)
生き行くは楽しと歌ひ	(一八三)	みずからの行為はすでに	(二〇四)
雪深く庇につもる	(一八四)	追ひつめらるる思ひ語りし	(二〇五)
灯ともして帰る排土機	(一八五)	団結をたたへて上ぐる	(二〇六)
革命などすでにあらずと	(一八六)	異端には天の火群を	(二〇七)
支那留学生一人帰国し	(一八七)	柔和なるものの無数を	(二〇八)
守り得し彼らの理論	(一八八)	ひげのびし顔涙して	(二〇九)
漠然と恐怖の彼方に	(一九〇)	吾がためにリルケを読めり	(二一〇)
諍ひしあとを互ひに	(一九一)	くりかへし地上の軍を	(二一一)

一日唯線をたのしみ (二三)
 血を流し奪ひうばはれ (二三)
 悪びれず軍使に交り (三四)
 電車一台はやく吹雪に (三五)
 まなこ閉づれば吾が足音の (三六)
 幾万か軍備を拒み (三七)
 ピラ投げて捕はれて行く (三八)
 軀身のためサガレンに (三九)
 ためらひの故に重ぬる (四〇)
 一つのみつらぬき通す (四一)
 眼いため伏す少年と (四二)
 ひとりひとり友を失う (四三)
 政治のこの変説は (四四)
 冬きたる人の装い (四五)
 遠きよりひとりひとりに (四六)
 戦争の過ぎし聖夜の (四七)
 呪詛の声今は弱者らの (四八)
 行為なきもののみ錯誤 (四九)
 喚声は夜の街に止み (五〇)
 遠き世のいのりの歌よ (五一)
 秘めし思想も求めし戦死も (五二)

目守りつづくる白金埧埦に (三三)
 モンゴルのかたかと思ふ (三四)
 さし出すはゲリラの過去の (三五)
 過ぎて去る歴史にあらず (三六)
 ついに今日地上の貧しさの (三七)
 とんぼ返りしつづ追ひ来る (三八)
 幾夜短き北爆飛行の (三九)
 森くらくからまる網を (四〇)
 夢は暗き空のあかとき (四一)
 額あげて生き行く昼と (四二)
 血ながさぬ思想のたたかいの (四三)
 砂漠の軍みな円陣の (四四)
 いまひとりを敵に追いつめ (四五)
 語彙貧しくうちなる (四六)
 ペトナムと (四七)
 いづくよりいかなる指示に (四八)
 応召の夜を取り乱す (四九)
 深く寝ねしベッドに麵麴と (五〇)
 分割されしドイツと思わずと (五一)
 みずき落葉足音のごと (五二)
 朴の葉のときなく萎えて (五三)

戦後のことみなすぎ文学の	(三五)	遠く秘めて読みたるものに	(五九)
夜をさめておそう寂しさは	(五四)	父と母と扶けて風呂に	(六〇)
エレミヤ記読む夜の眠り	(五五)	たわむれに似て呼び合えば	(六一)
軍を退く一国の示威	(五六)	生き得しもの生きつぐ時の	(六二)
ただ眠る日々の疲れを	(五七)	ひとりだに還らざりしを	(六三)
はるか学びし日につづく		獄に死を待つを無力の	(六四)
ごと	(五八)		

作品選	二六五
-----	-----

著書解題	二七三
------	-----

近藤芳美略年譜	二八〇
---------	-----

短歌索引	二九六
------	-----

装画 佐藤多持

作家研究編

一 搖籃期

1 朝鮮に生まれた

近藤芳美は最も辞典的記述をすれば、「戦後短歌の旗手として、その自立に最も大きな役割を果たした歌人であり、戦争を経てきた知識人の立場から時代状況との緊張関係を歌いつづけてきた点に一貫する特色を見る。」（本林勝夫）とされる歌人であり、ひょっとしたら歌人以上の何者かであるかも知れぬ何かなのである。歌人を擱まえて歌人以上の何者かである、とははなはだ妙な言いようだと思う。しかし、その意味はこの一巻を読み終えたとき判っていただけよし、ここでは文学者として一世界を担いつづけた、単にひよひよとした美に惑溺する三十一文字の作者でない、とだけ誌して出発することにした。

近藤芳美は大正二年（一九一三）五月五日、朝鮮半島の馬山に銀行員の長男として生まれている。本名芽美^{よしみ}、のちに一人の弟と二人の妹がある。小学校は北鮮咸興で入学しているが、朝鮮各地を父の転勤とともに移転した。

この植民地朝鮮に、支配者日本人の子として生まれたこと、及びそれが一九一三年であったことの意味の深さは、おそらく誰が考えるより歌人近藤芳美の存在そのものに絡んでいる。

というのは、誰もたしかに時代と環境に縛られずにその生涯はない、しかし、近藤芳美ほど

その場所とその時代を自らの宿命として負いつづけることで己れの歌人形成をしたものはないと考えられるからである。それは植民地アルジェリアに育ったフランス人アルベール・カミュにやや似ているかも知れない。

海遠く対馬の見ゆるよろこびを知りて育ちき少年の日よ

『静かなる意志』

残る井戸要塞に遠き磯なりし夢ありありと幼き馬山浦

『異邦者』

ずっと後年の回想であるがここに引いておく。

当時の朝鮮を岩波全書『朝鮮史』（旗田巍）、及び岩波新書『朝鮮』（金達寿）から復原してきた。

「韓国を併合した日本は朝鮮総督府を設け、総督に朝鮮支配の全権をもたせた。総督は親任官とし、陸海軍大將がこれに任じ、天皇に直隸して朝鮮の政務および軍務を統轄する絶大な権力をもった。初代総督には陸軍大臣寺内正毅が就任し、いわゆる武断政治を施行した。警察と憲兵とを統合し、中央の警務総長には憲兵司令官を、各道の警務部長には憲兵隊長をあて、憲兵の指導下に治安をとり締った。……（中略）……朝鮮人の結社・政治的集会はもとより、屋外における多人数の集会まで禁止され、朝鮮文字の新聞の刊行は許されず、また朝鮮人の政治的発言の道は完全に抑えられた。軍人でない官吏や教員まで制服を着用し、腰に剣をさげ、専ら威圧によって朝鮮人を屈服させようとした。」

（旗田『朝鮮史』）

右は一九一〇年（明治四三）の日韓併合に関する記述であるが、一年前の一九〇九年、朝鮮を

保護国とした初代の統監伊藤博文は安重根に殺されている。そして短歌に多少でも関心のある読者ならば、何より「明治四十三年」という数字から石川啄木の、

つね日頃好みて言ひし革命の語をつつしみて秋に入れりけり

秋の風我等明治の青年の危機をかなしむ顔撫でて吹く

時代閉塞の現状を^{いか}奈何にせむ秋に入りてことに斯く思ふかな

地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつつ秋風を聴く

明治四十三年の秋わが心ことに真面目になりて悲しも

の一連を思い出すにちがいない。「地図の上」の一国に「くろぐろと墨をぬ」とは、決して日本の領土のふえたことを喜ぶそれではない。帝国主義日本という認識をすでに啄木は持ち、それゆえに猛進の邪魔になる無政府主義者幸徳秋水らをフレイム・アップにより死刑にしてしまふ国家権力の在りようを複眼で見据えつつこの一連八首はある。啄木はこのいわゆる「大逆事件」に関して早く評論「時代閉塞の現状」を書き、次いで「無題」「日本無政府主義者陰謀事件経過及び附帯現象」「A LETTER FROM PRISON」「所謂今度の事」「平信」等を書き、足早に二十七歳の生涯を一九一二年（明治四五―大正一）に終る。

近藤芳美の生まれたのは、その翌年のことである。近藤芳美に「アララギ」畑では珍しい『石川啄木における文学と生』という著書があるが、決してたまたま書いたというものではない由縁は、啄木の生の終りに続く彼の生の始まりという事実にある。つまり彼は、啄木の告げてやまぬ「時代閉塞の現状」の中へ生み落されたのである。

少しもとへ戻る。

一九一〇年八月、第三代統監であつた陸軍大将寺内正毅は、数十隻の軍艦をもつて威嚇を加へつつ、併合条約に調印を要求、すでに一九〇七年軍隊を解散させられていた総理事李完用は、「韓国皇帝は、韓国全部に関する一切の統治権を、完全且つ永久に、日本国皇帝に譲与する」という条約文に調印させられた。

以下、金達寿^{キム・ダス}の文を借りると、

「それが発表されると、朝鮮全土は大地を叩いて慟哭するものの声で充ちたということであるが、調印と同時に、初代の総督を約束されていた寺内はその夜祝宴を開いて、次のような歌をよんだ。

小早川加藤小西が世にあらば今宵の月をいかに見るらむ

その得意たるや、思うべしである。」

(金『朝鮮』)

まことに寺内の内心は、軍人らしく明けつびろげで正直に侵略の成功、己れの手柄をこれ見よと歌っている。三百十余年前の戦国武将と己が功とを並べて自祝しているのである。しかし、その歴史感覚の欠如をもつて素直であるとか素朴であるとは言えない。この素直さは帝国主義国の一員にアジアの国としては最初に、そして唯一のそれとなつた日本の権力の正直きわまりない無邪気さ、歴史感覚が出ているからである。

事実、寺内が歌について発したことばは、

「朝鮮人はわが法規に屈服するか、死か、そのいずれかを選ばなければならぬ。」